

商学部における特色ある学部教育の補助「見学調査」 報告書

テーマ : 戦時下日本の社会を知る

科目名 : ベーシック演習Ⅱ

担当教員 : 村上 研一

調査先 : 東京大空襲戦災資料センター

調査日 : 2026年1月16日(金)

参加学生数 : 1年生 4名 2年生 名 3年生 名 4年生 名

調査の趣旨（目的）

授業では、本田由紀著『日本ってどんな国?』をテキストに、日本社会の特徴や外国との比較などについて報告と議論を行ってきた。議論の中で、戦後の日本は80年間戦争をしてこなかったこと、また戦争の記憶が薄れていることが議論された。そこで、東京が大きな戦争被害を受けた東京大空襲の実相と、その中で人々の暮らしについて知ることを目的に、東京大空襲戦災資料センターに見学調査を行うこととなった。調査を通じて、80年前の日本の戦争の実相とその中での人々の暮らしの様子について学ぶことを目的とした。

調査結果

まず、東京大空襲のあらましに関するビデオ教材を視聴した。実際の空襲被害者であり、戦後は東京大空襲被害について研究してきた元館長（故人）が、第2次大戦の戦況と東京空襲の経緯、また非戦闘員の殺害により戦意喪失をはかる空襲の狙い、また日本の住居を効率よく燃やすための焼夷弾の仕組みについて説明があった。その後、同資料センターの学芸員より、空襲の実相と当時の人々の生活について詳しい解説を受けた。

灯火管制や隣組による生活の監視、戦争への不満を持つ人には配給の食料が減らされる、など戦時下の厳しい生活を強いられていたこと、空襲による火災から逃げてはいけないという法令、また「焼夷弾は大したことない」などという回覧などが紹介され、人々が戦争協力を強いられていた実相が生々しく理解できた。また、太平洋戦争で空襲を受けた日本は、実は1930年代から中国などへの無差別空襲を行っていたこと、また今日に至るまで、世界各国が非戦闘員を狙った無差別爆撃を続けてきたことなどが説明され、空襲被害は過去の問題でないことが理解できた。また、空襲犠牲者数の実態は今なお不明で、空襲被害者の被害体験の伝承が不十分な現状を知ることができ、戦争被害を継承していくことの意義を痛感した。

このように、東京大空襲の実態を知ることによって受講者は、戦争と平和の問題は、現代に生きる我々にとって他人事でない重要な課題であることを学ぶことができた。